

平和を未来につなげよう

2025 年は終戦から 80 年の節目の年です。戦没者の遺族や戦争体験者の高齢化が進む中、平和の尊さを次の世代に伝えることは急務となっています。

今回の特集では「悲劇を二度と繰り返してはいけない」という思いからご協力くださった皆さまへのインタビュー内容をご紹介します。

娘を思う優しい父

私の父・徳治は警視庁に務めており、私たちは東京で暮らしていました。

昭和19年2月20日に召集された父は当初、高崎市に配属され、翌年、フィリピン・ルソン島での戦闘に参加し、昭和20年5月5日にパンガシナン州サクラサク峠にて帰らぬ人となったと聞いています。37歳の若さでした。

当時、私は2歳。妹は生後間もなかったので、父の顔や声すら覚えていません。

戦地に赴く前に母親に宛てた手紙には「子どもに着物でも買ってください」などと、私たちを気遣う言葉が綴られました。



八郷地区遺族会会長
菅原 光江さん (84)

昭和16年生まれ。石岡市在住。太平洋戦争で父・徳治さんを亡くす。平和を後世に伝えるために、令和7年度より八郷地区遺族会で会長を務める。



▲戦死した父・徳治さん

戦争が奪った日常

父が出征してからは、石岡

ており、優しい父だったことがうかがえます。

手紙には「行き先はフィリピンですから、しばらくはお手紙も差し上げられませんが」と書かれていましたが、それが最後の手紙となりました。遺骨として送られてきた包みには、どこのものかわからない砂が入っていただけでした。

市の茨城に母の生家があったので、そこでお世話になっていました。空襲警報が聞こえると、衣類などを包んだ風呂敷包みを背負って、母や妹と竹山に逃げ込みました。間に合わないときは、茶畑のお茶の木の根元や家の隅に隠れて、おびえながらB29が去るのを待ちました。その頃、近くで農作業をしていた人たちが被害に遭ったと聞き、幼心にも恐怖におののいた記憶があります。

農家でしたが、米は供出国の要請によって物資を差し出すこと（してしまっていたので、サツマイモや、その茎を食べて飢えをしのいでいたことを覚えています。

父が亡くなってから母は大変、苦労しました。女手一つで私たちを育てるため、父方の本家や近所で農作業の手伝いをしていました。朝起きると、母はすでに田や畑に出かけていました。

働きづめの毎日でしたが、母は弱音を吐くことなく、私たちのために懸命に働いていました。

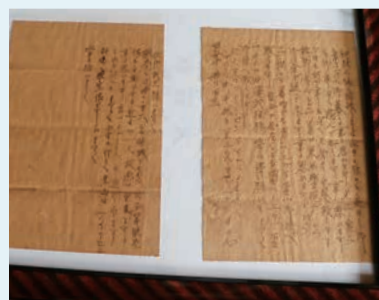
悲しみを繰り返さない

私は、母が歯を食いしばり、辛いのをこらえている姿を見るたびに、父を奪った戦争が憎かったです。

幸いなことに、私は近所の方、親戚の方などたくさんの方に支えられ、ここまで来ることができました。助けてくださった方には感謝の気持ちでいっぱいです。

しかし、現在も世界では紛争や内戦が相次いでいます。テレビを見ると、子どもやお年寄りなど弱い立場の人が真っ先に犠牲になっている映像が流れてきます。

戦争をすれば誰が得をするのでしょうか。誰も得はしません。平和な世の中が続くことを心から願っています。



▲戦地に行く前に母に送られた手紙

「赤とんぼ」に憧れて

私が石岡国民学校高等科に在学中だった昭和17年、日本は軍国主義の真っ只中で「若鷺の歌」や七つ鉦の憧れの軍服姿のポスターなどで少年兵の獲得に力を入れていました。その頃、石岡出身の予科練生が九三式中間練習機（赤とんぼ）で郷土凱旋飛行を行ったのを見た私は「少年飛行兵になり、国のためになろう」と思いました。

両親や兄は大反対しましたが、高等科2年の秋（昭和18年10月）に海軍志願兵試験を受験し、翌年2月に憧れの土浦海軍航空隊で二次試験を受験しました。5月中旬に合格



人吉海軍航空隊第6期生
田村 貞雄さん（96）

昭和4年生まれ。石岡市在住。昭和19年10月に熊本県の人吉海軍航空隊に入隊。卒業後、昭和20年4月に鳥取県的美保航空基地に派遣され、終戦を迎えた。現在は、ターゲットバードゴルフなど高齢者の健康増進を目的としたスポーツの推進に尽力されている。



▲入隊当時の田村さん

厳しかった軍隊生活

航空隊は球磨川の上流にあり、冬は寒さの厳しいところがありました。航空隊では、国語や数学などのほか、航空

通知が届き、熊本県の人吉海軍航空隊への入隊を命じられました。

親戚をはじめ、近所の人や青年会の楽隊に見送られ、石岡駅から故郷を後にした私は、昭和19年10月15日、15歳で熊本県の人吉海軍航空隊に入隊しました。

学・通信工学・気象学・相撲・対抗競技（棒倒し・一万米走）などの課程がありました。当時は罰直というものがあり、相撲や対抗競技で同じ班から脱落者が出ると、棒で尻を叩かれる、重い台を腕で支えさせられるなどの懲罰が待っていました。

また、軍人としての心構えを説いた「軍人勸諭」を初日から暗記させられました。お手洗いや吊床（ハンモック型の寝床）の中で涙ながらに暗記したのを覚えています。

大空に消えた戦友たち

6カ月の厳しい訓練の後、普通課程を卒業した私は、鳥取県にある美保航空基地への配属を命じられました。当時の美保航空基地はアメリカ軍の攻撃でほとんどが消失し、満足な食糧もない中、私は搭乗飛行整備兵として、攻撃機「銀河」や特攻機「桜花」などの整備に従事しました。

あと半年、終戦が遅ければ、私は特攻機に搭乗していたと思われまふ。

人吉海軍航空隊を卒業した

先輩たちは特攻兵として飛び立っていきまふ。週2回は特攻機が出撃していくのを、私たちは「帽振れ」（別れのあいさつとして帽子を振ること）で見送りました。もちろん、帰ってきた先輩は一人もいません。



▲美保航空基地で攻撃機を整備する様子

玉音放送、そして終戦

昭和20年8月15日、突然、集合を知らせるラッパが鳴りました。いわゆる「玉音放送」が流れましたが、当時は何を言っているのか理解できませんでした。ただ、分隊長も班長も全員、悔し涙を流していました。

その後、残務整理に従事した私は、9月2日に美保航空基地から石岡への帰途につきました。

鎮魂と平和への祈り

石岡駅に着いた私の姿を見るやいなや、迎えに来た父は駆け寄ってきて私を強く抱きしめてくれました。私が入隊してから、父は毎日、常陸國總社宮をお参りし、無事を祈っていたそうです。

その後、私は20歳の時に石岡消防本部第1期生として入署し、42年間、消防職を全うすることができました。私の生涯の基礎には、あの辛かった軍隊生活と戦争があります。しかし、本来、子どもはいきいきと勉強やスポーツに励むべきであつて、か弱い少年を戦争に駆り出すことがあつてはなりません。終戦から80年を迎えた今日、再度「平和」について考えていただければ幸いです。



▲田村さんが鎮魂の思いを込めて制作した「零式戦闘機」の模型

令和6年度に平和大使を務めた2人に聞きました

私たちが広島で感じたこと

辛い現実を目を背けてはいけない

「知る」ことが「平和を築くこと」につながる

また、資料館には、溶けたガラス瓶や焼け焦げたお弁当箱、がれきの下から見つかった焦げた三輪車などが展示されていました。私は、遺品の

平和大使派遣事業に参加したきっかけは何ですか？
学校で戦争や原子爆弾の被害について学習したことがきっかけです。ただ学ぶだけで終わらず、実際にどのくらい被害があったのか、被害に遭われた人々はどう感じたのかを知りたいと思い、事業に参加しました。



小池 亮さん
(石岡中学校3年)

持ち主に関する話を知ったとき、遺族の悲しみや絶望を感じ、戦争が人々の生活をどれほど残酷に奪い、耐え難い苦しみを与えるのかを考えさせられました。

小池さんにとって「平和」とはどのようなものですか？
家族と一緒に過ごしたり、友達と話したり、笑ったり、当たり前のことが安心してできることだと思います。

読者の皆さんに伝えたいことはありますか？
正直なところ、私は広島を訪れるまで戦争の悲惨さ、原子爆弾の恐ろしさを知っているつもりでした。しかし、実際に訪れてみるとたくさんのことに気付かされました。

「昔のことだから…」と無関心になってしまうことは、戦争への第一歩だと思います。個人ができることはとても小さいことかも知れませんが、広島で感じた戦争の悲惨さを、決して過去の出来事として忘れることなく、一人一人が戦争の恐ろしさを未来に伝えることが、平和を守り続けるためには重要だと思います。

「平和」とはみんなと笑って過ごせる何気ない日々

世界が本当の「平和」になるまで伝え続けたい

平和大使派遣事業に参加したきっかけは何ですか？
世界では今も戦争という悲しい現実があり、けがをしたり、命を落としたりする人が今もいるという現状を知ったからです。私の曾祖母は、戦争を体験しており、戦時中、モンペを履いていたことや、米がなくサツマイモを食べていた話などを伝え聞いていました。戦争についてより深く理解し、学校や地域の人々に戦争の悲惨さや、平和の大切さを伝えられたら、と思い事業に参加しました。

広島を訪れて最も印象に残ったことは何ですか？
広島平和記念資料館で数々の展示を見たことです。被害を受けた展示物や写真を見たことにより、戦時下の苦しい状況が想像でき、改めてその



石田 陽愛さん
(八郷中学校3年)

悲惨さを痛感しました。

石田さんにとって「平和」とはどのようなものですか？
平和とはみんなと笑って過ごせる何気ない日々を築いていくことだと思います。戦争が起こってしまった過去は変えられませんが、未来は自分たちで創り上げることができ

読者の皆さんに伝えたいことはありますか？
昨年、日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しました。今年は原爆投下から80年が経ち、ニュースで取り上げられることが多くなると思います。これを機に戦争について知ることや平和の大切さについて考える人が少しでも増えたらいいと思います。戦争はたくさんの尊い命を奪い、苦しみを与えました。そして、原子爆弾が投下されたのは、世界で日本だけです。この苦しみを味わったからこそ、二度とこの悲劇を繰り返してはいけないと思います。世界が本当の平和になるまで、私はこのことを伝え続けていきます。